

2012年(平成24年)6月10日(日曜日)

現代読書灯

政権交代とは何だったのか 山口一郎著(岩波新書 840円)
いま、「政治の質」を変える 辻元清美著(岩波書店 1785円)

政治・思想

民主党政権の立ち往生

杉田 敦

2009年の政権交代は、政策課題をめぐって政党が競い合う本格的な民主政治の開始を予感させた。しかし、一時の期待も今は冷め、「決められない政治」への不満が社会を覆っている。政権交代のある政治実現を目指し、政治改革論を主導してきた一人である山口一郎は、失敗の背後に政治改革論の欠陥があったと認める(「政権交代とは何だったのか」)。政治改革論では、政治によって具体的も、民主党政権の立ち往生に

に「何を」、すなわちどういふ政策を実現すべきかは棚上げされ、「誰が」、すなわち官僚と政治家のいざれが政治を主導するかといった、統治形式のみが問題にされた。政

策論議がなかったからこそ、民主党が内部対立を隠したま

ま「方便政党」をつくること

もできたわけであるが、その馬脚は政権獲得後すぐにあらわれた、というのである。政

が、発言が思いつきに見えるため人びとに受け入れられなかつた、という。辻元自身は、

副大臣として日本航空の整理

を担当した際、一步間違えば大混乱という状況で、ボーカ

「フェイスで利害調整をやつ

てのけた」という。「政治とい



ヒューマニティーズ 政治学 矢部直著(岩波書店 1365円)

つながったと言ひ。つながった」といふ事態はどう映ったのか。辻元清美は、NPOの代表者(いま、『政治の質』を変える)。しかし、そうした特長が政治的未熟さと裏表の関係にあることも辻元は指摘している。基地移転についての鳩山元首相の問題提起自体は有意義であったが、国内やアメリカ力を説得する準備が全く欠落していた。菅前首相のエネルギー政策は評価できるが、発言が思いつきに見えるため人びとに受け入れられなかつた、という。辻元自身は、丸山に矢部は注目する。丸山は、この本で政治といふものがもつ不気味さ、「どんなに立派な理想であつても、それを政治といふ迂回路を用いて実現しようとしたときに」「汚れた世界」に引き込まれかねないとへの不安を描いてもいる。しかし、それでもなお、さまざまな利害を調整し、現実を少しでも理念の方に向けて行くためには、演技能力が必要だというのである。舞台はさておきの政治の現実ではないか。

うのは、ステージの幕がある時には大半終わっている」という自民党政治家の言葉を引きつつ、辻元は、政治的なスキルの重要性を強調する。自ら認める通り、小泉元首相に「ソーリー、ソーリー」と食い下がっていたところとは様変わりだ。「政治とは悪さ比べとも辻元はいうが、政治学者・丸山真男が好んで引いた悪さ加減の選択」(福沢諭吉)を想起させる。矢部直は「ヒューマニティーズ 政治学」で、その丸山と保守派の論客であった福田恒存が六〇年安保等をめぐって行つたやりとりにふれている。「一般の人びとは自己利益しか考えてなく、政治に理念を持ち込むのは「偽善」とした福田に対しても、「政治が『高度の演技の世界』である以上、それは偽善と実は切り離せない」と論じた丸山に矢部は注目する。丸山は、この本で政治といふものがもつ不気味さ、「どんなに立派な理想であつても、それを政治といふ迂回路を用いて実現しようとしたときに」「汚れた世界」に引き込まれかねないとへの不安を描いてもいる。しかし、それでもなお、さまざまな利害を調整し、現実を少しでも理念の方に向けて行くためには、演技能力が必要だというのである。舞台はさておきの政治の現実ではないか。